九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

杜甫の詩における楊貴妃像

重松，詠子
九州大学聴講生

https://doi.org/10.15017/9600

出版情報：中国文学論集. 33, pp.76-90, 2004-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

中国文学論集　第三十三号

杜甫の詩における楊貴妃像

重松詠子

天宝十四載（七五五）に勃発した安禄山の乱は、言うまでもなく杜甫（七一二～七七〇）の生涯を左右した大事件であった。そして、乱の中で起こった最大の悲劇が、馬嵬における楊貴妃の死である。盛唐の象徴とも言えるこの麗人を、同時代人の杜甫はどのようにとらえていたのであろうか。従来、清・仇兆鰲『杜詩詳注』[1]（以下、『詳注』と略する）を代表とする諸注では、おおむね杜甫の楊貴妃に対する諷刺・批判を詩中から読み取ろうとしてきた。一方、吉川幸次郎『杜甫私記』は、乱以前の杜甫にとっては楊貴妃とその一族は「憎悪の対象」であったが、貴妃の無残な死はにわかに杜甫の悲哀をかきたて、晩年の詩には貴妃への哀傷や憐愍がみられる[2]とする。

杜甫が描く楊貴妃像は、確かにあるときは悪女であるが、あるときは明らかに悲劇のヒロインでもあり、決して一定した像を結んではいない。時には、楊貴妃を深く悼む詩が作られてからまもなく、一転して彼女に対する厳しい譏刺が述べられていることもある。こうした杜甫の態度には、何か背後に理由があるのではないか。また、楊貴妃に対する批判が描かれていると従来解釈されてきた幾つかの作品にも、再検討の余地がないだろうか。小稿は、楊貴妃関連の杜甫詩を乱以前・乱中・晩年の三期に分け、検討を試みるものである。

一　乱以前の楊貴妃観

安禄山の乱以前の杜甫が楊貴妃に対し批判的であった証左として、常に引き合いに出されるのが、天宝十二載

（七五三）の「麗人行」（『詳注』巻二）である。この詩において杜甫は、「就中雲幕椒房親　賜名大國虢與秦（就中雲幕の椒房の親、名を賜ふ　大国の虢と秦と）」と、楊貴妃の姉・虢国夫人と秦国夫人を名指しにし、続く詩句で彼女たちの贅沢な食事のさまを写す。さらに、丞相楊国忠がテントの中に入って虢国夫人との歓楽に耽るさまを、

楊花雪落覆白蘋　青鳥飛去銜紅巾
炙手可熱勢絶倫　慎莫近前丞相瞋

楊花　雪のごとく落ちて白蘋を覆ひ、青鳥　飛び去りて紅巾を銜ふ
手を炙らば熱かるべし　勢ひ絶倫なり、慎しみて近前する莫かれ　丞相瞋らん

と述べ、婉曲な表現ながら、楊国忠と虢国夫人の不倫関係を痛烈に風刺している。

ただ、この詩に登場するのは楊貴妃の姉たちと楊国忠のみで、楊貴妃当人はこの場に現れない。したがって、この「麗人行」で行状を直接に批判されているのは、あくまでも楊氏一族であって、楊貴妃自身ではないことになる。

また、乱勃発時と同年同月の天宝十四載（七五五）十一月に作られた「自京赴奉先県詠懐五百字」（『詳注』巻四）では、長安から妻子のいる奉先へ向かう道中の杜甫が、当時玄宗や楊国忠が滞在していた驪山のふもとを通りかかって、「況聞内金盤　盡在衛霍室（況んや聞く　内の金盤、尽く衛霍の室に在りと）」と述べる。衛青・霍去病のごとき天子の外戚が、本来皇帝のものであるべき黄金の皿をことごとく自分のものにしているというこの詩句の内容からは、外戚・楊氏一族の権勢と奢侈に対する強い非難が読み取れる。しかしながら玄宗については、詩の前半部で、「生逢堯舜君　不忍便永訣（生きて堯舜の君に逢ふに、便ち永訣するに忍びず）」と、堯・舜に喩えられていることからも明らかなように、杜甫の批判の対象とはなっていない。また、玄宗に侍る楊貴妃についても、特に言及はない。

乱以前の杜甫が楊氏一族の奢侈や醜聞に対し、批判の眼を向けていたことは確かであろう。しかしこの時期杜甫は一方で、楊国忠の腹心の人物に詩を送り、楊国忠への仲介を頼んだりもしている[3]。また、「麗人行」における楊家の女性たちの描写からは、一種の否定しきれない美への憧憬のようなものも感じ取れる。貧しい一書生であった杜甫は楊氏一族に対して、奢侈への義憤と華やかさへの憧れとが入り混じった複雑な感情を抱いていたのではない

だろうか。

従来の研究では、楊氏一族への批判はそのまま楊貴妃自身への批判でもあるととらえられ、両者を分けて解釈されることはほとんどなかったように思われる。しかしながら、馬嵬で楊貴妃に死を要求した兵士たちならともかく、士人たる杜甫、しかも乱勃発以前の杜甫が、はたして楊貴妃と楊氏一族とをまったく一まとまりに批判の対象としていたであろうか。杜甫にとって、偉大な皇帝たる玄宗は明らかに崇敬の対象であった。したがって、玄宗の事実上の皇后たる楊貴妃も、（その親族は批判の対象であったとしても）やはり敬慕すべき対象ではなかっただろうか。まして、楊貴妃自身はさほど政治に介入していないことを杜甫は聞き知っていたであろうから、少なくとも、貴妃個人に対しあからさまに悪感情を抱いていた可能性は少ないと考えられる。

このことは、乱前の作「奉同郭給事湯東霊湫作」（『詳注』巻四）からも推察できる。驪山の離宮の東に龍が住むという池があり、そこに玄宗と楊貴妃が行幸して祭祀を行ったところ、池の底から金色の巨大な蝦蟆が這い出てきたが、玄宗と楊貴妃の意向によって再び池に放たれた。随行の侍従の一人であった郭給事がそのことを詠い、杜甫が和したものである。この詩には先掲の二詩とは異なり、楊貴妃自身が登場する。

百祥奔盛明　古先莫能儔　　百祥　盛明に奔まり、古先も能く儔ひする莫し
坡陀金蝦蟆　出見蓋有由　　坡陀たる金蝦蟆、出で見るるも　蓋し由有り
至尊顧之笑　王母不遣收　　至尊（＝玄宗）之を顧みて笑ひ、王母（＝楊貴妃）収へしめず
復歸虚無底　化作長黄虬　　復た虚無の底に帰り、化して長き黄虬と作る

金の蝦蟆という奇瑞の出現に、玄宗はうち微笑み、楊貴妃はそれを捕らえずに池に帰してやる。池の底へ帰った金蝦蟆が黄色い虬龍に変身したという描写からは、玄宗・楊貴妃の慈悲の行為が王室の安泰につながるという賛美も見て取れよう。ここでは楊貴妃は西王母にたとえられ[4]、神仙的な形象を帯びている。なおこの詩については、「金蝦蟆」が帝位をねらう安禄山を暗示し、太平の時代にしのびよる危機の予兆を詠った作であるという説が見られる

が、いまだ十分には立証されていないように思われる。[5]

二　乱中の楊貴妃像

安禄山の乱が勃発し、楊貴妃が馬嵬で惨死したことを杜甫が知ったのは、賊軍によって長安に拘禁されていた頃であった。至徳二載（七五七）春の一日、彼は長安第一の行楽地であった曲江にひそかに赴き、貴妃を悼む詩を作る。

哀江頭

少陵野老呑聲哭　春日潛行曲江曲　　少陵の野老　声を呑みて哭し、春日潛（しのび）やかに行く　曲江の曲
江頭宮殿鎖千門　細柳新蒲爲誰綠　　江頭の宮殿　千門を鎖ざし、細柳　新蒲　誰が為にか緑なる
憶昔霓旌下南苑　苑中萬物生顏色　　憶ふ昔　霓旌は南苑に下り、苑中の万物　顔色を生ぜしを
昭陽殿裏第一人　同輦隨君侍君側　　昭陽殿裏第一の人、輦を同じくし　君に随ひ　君側に侍す
輦前才人帶弓箭　白馬嚼齧黃金勒　　輦前の才人　弓箭を帯び、白馬　嚼齧（しゃくけつ）す　黄金の勒（くつばみ）
翻身向天仰射雲　一箭正墜雙飛翼　　身を翻し天に向ひて仰ぎて雲を射る、一箭　正に墜とす双飛の翼
明眸皓齒今何在　血汚遊魂歸不得　　明眸皓歯　今何くにか在る、血汚の遊魂　帰り得ず
清渭東流劍閣深　去住彼此無消息　　清渭は東流して剣閣深く、去住彼此　消息無し
人生有情淚沾臆　江水江花豈終極[6]　　人生情有り　涙　臆（むね）を沾（うるほ）す、江水江花　豈に終に極まらんや
黃昏胡騎塵滿城　欲往城南望城北　　黄昏　胡騎　塵は城に満ち、城南に往かんと欲して城北を望む

（『詳注』巻四）

この詩で杜甫は、楊貴妃の死を悼んで「声を呑み」つつ慟哭し、涙で「臆を沾」している。かつての曲江への行幸は、馬上の女官がつがいの鳥を射落とすという一瞬の鮮烈な光景――華やかな遊興の一シーンであると共に、玄宗と楊貴妃の来るべき運命を暗示する光景――を頂点として、悲しくも美しく回想されている。ここでの楊貴妃は明らかに杜甫の哀悼の対象であり、二度と戻れない盛世の象徴でもある。貴妃を非難する言葉はこの中にはない。

ところが、「哀江頭」を作った同年（至徳二載）の秋、杜甫は長篇「北征」（『詳注』巻五）において、一転して痛烈な措辞を連ねる。

姦臣竟菹醢　同惡隨蕩析　姦臣（＝楊国忠）竟に菹醢（そかい）にせられ、同悪（＝楊貴妃）隨ひて蕩析せらる
不聞夏殷衰　中自誅褒妲　聞かず　夏殷の衰へしとき、中に自ら褒妲を誅せしを
……　……
桓桓陳將軍　仗鉞奮忠烈　桓桓たり陳将軍、鉞（まさかり）に仗（よ）りて忠烈を奮ふ
微爾人盡非　于今國猶活　爾　微（な）かりせば人は尽く非、今に于いて国猶ほ活く

ここで楊貴妃は褒姒や妲己になぞらえられており、さらに楊国忠・楊貴妃殺害の進言者であった陳玄礼の忠烈が称えられ、「あなた陳玄礼がいなかったら人民はことごとく悲惨な状態に陥ったであろう、いま国家が存続しているのはあなたのおかげだ」とまで述べられている。ここでは楊貴妃は国を滅ぼした元凶として描かれている。

では、楊貴妃の死から間もない頃に書かれた以上の二作品が、一方は楊貴妃に対してより批判的、一方はより同情的であるのはなぜだろうか。また、その背景にあるものは何だろうか。

この疑問の答えとして従来の注では、「北征」は公的な作品であり、「哀江頭」は私的な作品であるからだという説明が多くなされている[8]。その根拠については必ずしも十分な説明が示されていないようであるが、私見では、この二詩の相違は、二作品製作の間における、杜甫の境遇の大きな変化に拠るものと考えられる。先に述べたように、「哀江頭」制作時の杜甫は、長安に拘禁される一市民でしかなかったが、「北征」は、鳳翔の亡命政府のもとに走った杜甫が左拾遺の職を授けられた後に作られたものである。この亡命政府は、楊氏一族及び楊貴妃に対し極めて批判的であったと考えられる。たとえば『旧唐書』巻十、粛宗本紀には「楊國忠依倚妃家、恣爲褻穢。懼上英武、潛謀不利、爲患久之。（楊国忠　妃家に依倚し、恣（ほしいまま）に褻穢を為す。上〈＝粛宗〉の英武を懼れ、潛かに不利を謀り、患を為すこと之を久しうす。）」という記述があり、皇太子時代の粛宗が楊国忠に迫害を受けていたことがわかる。ま

た、『資治通鑑』唐紀三十三によれば、安禄山が洛陽を陥れたとき、玄宗は帝位を太子に譲って親征することを楊国忠に提案したところ、楊国忠は大いに懼れ、退廷後、韓・虢・秦三夫人に対し、「太子は以前から吾家の専横久しいことを憎んでいる。もし、位が太子に譲られれば、私も姉妹も命が危ういだろう」と泣いて訴え、三夫人を通じて楊貴妃を説得させたところ、楊貴妃が玄宗に哀願したので、親征は取りやめになったという。[9] こうした記述から、粛宗が太子時代から楊氏一族の政敵であったことがわかる。したがって粛宗の亡命政府では、誅殺された楊氏一族及び楊貴妃を批判し、乱の原因を彼らに求める見方が支配的だったと思われる。左拾遺の任にあった杜甫は当然その路線に沿って詩を書くことが求められたであろう。その結果生まれたのが、楊貴妃を悪女として描いた「北征」ではなかっただろうか。[10] この「北征」という大長編は、詩の冒頭と末尾に時局への見解や勧告が記されていることから、粛宗へ捧げることを意識した公の作品であったと考えられるのである。杜甫は「哀江頭」を作った頃には一個人の視点から楊貴妃を哀悼していたのだが、長安を脱出して左拾遺の職を得た後は、公的な立場から悪女としての楊貴妃像を造型する必要が生じたのではないだろうか。なお、このときの杜甫とよく似た状況が、五十年後に同じく左拾遺の職についた白居易にも生じていることにも注意したい。[11]

また、「北征」作成より少し前、杜甫は鳳翔の安在所で玄宗派にあたる宰相房琯が罪に問われたのを弁護したため、粛宗の怒りを買い、一時は罪に問われている。許された後も、房琯の一派とみなされ、言いたいことを思うように言えない状況にあった。こうした状況も、この「北征」の楊貴妃像が生まれる一因とはいえないだろうか。「北征」は言うまでもなく、杜甫が精魂を込めた一大傑作とされているが、家族との再会が描かれた、詩の中間部分の生き生きとした描写と比べると、楊貴妃を弾劾した部分の描写はむしろ平板に感じられる。

さて、ここで一つ確かめておかねばならないのは、「北征」は「哀江頭」よりも後の作品であるから、鳳翔到着後、亡命政府の輿論に影響を受けて、杜甫の楊貴妃観そのものが同情から嫌悪へと変化を来たしたのではないかという可能性である。この可能性の是非を検討するために、鳳翔到着以降の作品で、「哀江頭」の詩境に通じる作品がないかどうかを考えてみたい。次に掲げる詩は「北征」作成の翌年、乾元元年（七五八）の作である。

曲江對雨

城上春雲覆苑牆　江亭晚色靜年芳
林花著雨燕脂落[12]　水荇牽風翠帶長
龍武新軍深駐輦　芙蓉別殿謾焚香
何時詔此金錢會　暫醉佳人錦瑟傍

城上の春雲　苑牆を覆ひ、江亭晚色　年芳静かなり
林花　雨を著けて燕脂落ち、水荇　風に牽かれて翠帶長し
龍武の新軍　深く輦を駐め、芙蓉の別殿　謾(みだ)りに香を焚く
何れの時か詔して此に金錢会ありて、暫く佳人錦瑟の傍らに酔はん

（『詳注』巻六）

この詩の作られる数か月前に粛宗と上皇（玄宗）は相次いで長安に戻っているが、玄宗は以前のように曲江に遊ぶこともなく、粛宗との仲も次第に険悪なものとなり、興慶宮で寂寥の日々を送っていた。この詩はそういった背景を踏まえている。さて、この「曲江対雨」は「哀江頭」のほぼ一年後に作られた作であり、どちらの詩も曲江という場所、春という時節を同じくしている。そして、「哀江頭」で玄宗楊貴妃のいない曲江の寂寥が描かれていたように、この「曲江対雨」でも、後宮の遊楽が絶えた曲江の光景が描かれている。また、第七句の「金錢会」とは、『詳注』などによれば、上巳節の曲江で開かれた、金錢を引き出物とする玄宗主催の盛大な宴会を指すもののようであるが、その金錢会に杜甫自らも加わって、教坊の美女の奏でる瑟の音を楽しむという夢想を描いた尾聯の内容からは、杜甫が宮廷文化をある意味肯定的にとらえていたことがうかがえる。後年の作である「観公孫大娘弟子舞剣器行」（『詳注』巻二十）や、「江南逢李亀年」（『詳注』巻二三）などからも、杜甫が梨園の弟子や宮中の遊楽に憧憬と懐旧の念を抱き続けていたことがわかる。安禄山の乱によって、開元天宝時代の華やかな宮廷文化が終焉を迎えたことを、杜甫は鋭く感じ取っていたであろう。したがって、「哀江頭」において、後宮の華やかな行幸を懐旧の念をもって描いた杜甫の心情は、「曲江対雨」においても途切れることなく持続していたと考えられる。

さらに、この「曲江対雨」では、はっきりとは示されていないものの、楊貴妃その人の姿が詩人の念頭にあるのではないかと思われる。たとえば頷聯では、曲江の風景の中に「燕脂」「翠帶」をつけた女性の姿が二重映しになっている。この「翠帶」という詩語は梁・簡文帝「傷美人」（『芸文類聚』巻三四）の、「翠帶留餘結、苔階沒故基（翠帶余結を留むるも、苔階故基を没す）」という部分を初出としているようであるが、この簡文帝の詩は題名から明

らかなように、皇帝が亡くなった美女を悼んだ詩である。また第六句には、玄宗を待つ曲江の離宮（芙蓉別殿）でむなしく香だけが焚かれている光景が描かれているが、『旧唐書』后妃伝に「玄宗凡そ遊幸有るとき、貴妃随侍せざるは無し」と記されているように、玄宗の曲江への行幸は必ず楊貴妃を伴っていたはずであるから、この詩句は玄宗の不在を示すと同時に、芙蓉別殿の女主人たる楊貴妃の不在をも表しているのではないだろうか。

ところで「曲江対雨」の詩語のいくつかが、『文選』や『芸文類聚』所収の、上巳節をテーマとした詩に典拠を持つと思われることから、おそらく「曲江対雨」は上巳節に作られた詩である可能性が高い[13]。安藤信広「『春望』――杜甫の孤独な春――」（『講座　現代の文学教育6』　新光閣書店、一九八四年）では、「哀江頭」が上巳節の作である可能性に触れ、その時節と曲江という場所から類推して、「哀江頭」が楊貴妃の魂を招き帰らせようとする招魂文学の性格を持つとする（二〇一～二〇二頁）。したがって「哀江頭」とは場所と時節を同じくする「曲江対雨」も、楊貴妃の招魂を願う要素を持つと考えられるのではないだろうか。なお、乱以前の「麗人行」も上巳節の曲江を舞台にした詩であり、水辺の艶やかな女性たちの姿は、杜甫の記憶の中で華やかな時代の象徴としてよみがえっていたと思われる。以上のような理由から、「曲江対雨」は、「哀江頭」のモチーフを引き継いで、玄宗及び楊貴妃が主宰した華やかな時代への思慕と追憶を表す詩であると考えたい。

「曲江対雨」と同時期の作品である「曲江二首」其一には次のような一節がある。

江上小堂巣翡翠　苑邊高塚臥麒麟　　江上の小堂　翡翠巣くひ、苑辺の高塚　麒麟臥す
細推物理須行樂　何用浮名絆此身　　細かに物理を推すに須らく行楽すべし、何ぞ用ひん浮名の此の身を絆ぐを
（『詳注』巻十八）

「江上小堂巣翡翠」は、『詳注』などでは、人気（ひとけ）のなくなったあずまやに翡翠が巣を作っているさまとし、安禄山の乱後の曲江の荒れ果てた光景を表すものと解釈されている。しかし「翡翠」そのものは、その羽が皇帝の旗の飾りに用いられたり、美玉の名称ともなっていたりするほどで、元来高貴で華やかなイメージを持つ禽鳥であり、さらに「鴛鴦」と同じく、夫婦和合の象徴でもある。『文選』や『芸文類聚』でも、「翡翠巣くふ」という詩語が荒

れはてた光景を表すものとして用いられている例はなく、杜甫のほかの詩でもそのようなニュアンスでは用いられていない。また、同時代の李白には次のような用例がある。

宮中行樂詞八首、其二

柳色黄金嫩　梨花白雪香　　柳色は黄金にして嫩かに、梨花は白雪にして香ばし
玉樓巢翡翠　金殿鎖鴛鴦　　玉楼に翡翠巣くひ、金殿には鴛鴦を鎖ざす
選妓隨雕輦　徵歌出洞房　　妓を選びて雕輦に随はしめ、歌を徵して洞房を出でしむ
宮中誰第一　飛燕在昭陽　　宮中誰か第一なる、飛燕は昭陽に在り

（王琦『李太白文集』巻五）

これは李白が宮廷詩人として玄宗に仕えていた天宝年間の作品であり、第三句にやはり「翡翠巣くふ」という表現が出てくる。ここでは翡翠が巣を作るという事象は、鴛鴦句と対になっていることからも明らかなように、瑞祥あるいは玄宗楊貴妃の仲睦まじさの象徴として用いられている。さらに尾聯「宮中誰か第一なる、飛燕は昭陽に在り」とは、趙飛燕になぞらえて楊貴妃その人の美貌を表した詩句であり、杜甫「哀江頭」の第七句「昭陽殿裏第一人」はこれと同工異曲である。以上のことから、「曲江」の「江上の小堂に翡翠巣くふ」という表現は、曲江の荒れ果てたさまを表すというよりは、むしろ、玄宗と楊貴妃が仲睦まじく曲江で遊楽していたさまを、翡翠の巣から追憶し、そこから主のいない曲江の寂しさを表現しているという解釈が可能となるように思われる。

「玉華宮」（『詳注』巻五）は、「北征」の直前に作られた詩であり、鳳翔から鄜州の家族のもとへ杜甫が帰省する途中に、唐太宗の離宮跡である玉華宮を通りかかって、その感慨を詠ったものである。荒廃した宮殿跡を駆け回る鼠や、青く燃える不気味な鬼火を仔細に描写した杜甫は、続いて次のように述べる。

美人爲黄土　況乃粉黛假　　美人　黄土と為る、況んや乃ち粉黛の仮なるをや
當時侍金輿　故物獨石馬　　当時　金輿に侍するは、故物　独り石馬のみ

これらの詩句は、竟陵王の乱（四五九）で壊滅した古都広陵を乱後まもなく訪れた鮑照が廃墟を描いた「蕪城賦」（『文選』巻十一）の一節、「東都の妙姫、南国の麗人、薫心紈質、玉貌絳脣ありしも、魂を幽石に埋め、骨を窮塵に委ねざるもの莫し。豈に同輿の愉楽、離宮の苦辛を憶えんや」という部分を思い起こさせる。従来、「玉華宮」の前掲の詩句は、太宗に仕えた昔の宮女たちのことを述べたものと解釈されているが、それだけでは終わらないのではないか。「玉華宮」が作られた時期は「国破れて山河在り」と杜甫が詠ったわずか数か月後のことであり、長安の荒廃は杜甫の記憶に生々しく残っていたはずである。繁栄と荒廃の象徴であるような玉華宮の姿は、それと容易に重ね合わせられたであろう。「玉華宮」の制作時期が「哀江頭」から半年も経っていないことも考え合わせると、「美人　黄土と為る」という詩句は、かつて玉華宮で太宗に仕えた宮女たちの死を表しているとともに、正式な葬いもされないままあわただしく馬嵬に埋められた楊貴妃のことをも意識下に置いた詩句ではないだろうか。

以上の「曲江対雨」「曲江」「玉華宮」といった諸作品から、鳳翔到着以降も、杜甫の真情は楊貴妃を悪女としてとらえるよりは、むしろ「哀江頭」に描かれたような哀惜の対象としてとらえることにあったと推察される。杜甫はわずか一年あまりで左拾遺の職を解かれるが、ついに粛宗政府と相容れなかったその理由の一端が、以上の詩篇からも窺えよう。

三　晩年の楊貴妃観

安禄山の乱が終結し、開元・天宝の盛世が遠い昔となっていくにつれ、楊貴妃は玄宗の追憶とともに、良き時代の象徴としていっそう美しく描かれていくようである。[14] たとえば大暦二年（七六七）夔州での作とみられる「宿昔」では次のように詠われる。

宿昔青門裏　蓬莱仗数移　　宿昔　青門の裏、蓬莱　仗　数移る
花嬌迎雑樹　龍喜出平池　　花嬌やかにして雑樹迎え、　龍喜びて平池より出づ
落日留王母　微風倚少兒　　落日　王母を留め、微風　少児に倚る

宮中行樂祕　少有外人知　　宮中の行楽は秘めやかにして、外人の知る有ること少なり（まれ）

（『詳注』巻十七）

第五句で楊貴妃は西王母にたとえられ、第六句では貴妃の姉たちが、漢の武帝の衛后の姉である「少児」に見立てられている。第八句の「外人の知る有ること少なり」は、おそらく陶淵明の「桃花源記」の一節、「外人の為に道（い）ふに足らざるなり」を踏まえているのではないかと思われる。詩全体に、桃花源あるいは仙界の美しくかつ神秘的な雰囲気が漂っており、楊貴妃も、かつて「麗人行」で行状を批判されていた楊貴妃の姉たちも、杜甫の追憶の中で美しく昇華されている。

この「宿昔」の内容と類似した内容の詩には、ほかに「洞房」、「解悶十二首」其九、「鬪鷄」、「能画」、「秋興八首」其六（以上すべて『詳注』巻十七）などの一連の作品群があるが[15]、紙幅の関係上、割愛したい。

おわりに

本稿では、杜甫が左拾遺として一時楊貴妃を批判する詩を作りつつも、その心中では一貫して貴妃に対する哀悼と追懐の念を持ち続けていたことを考察してきた。では、杜甫がこのように貴妃に同情的であった理由はなぜだろうか。敬慕する玄宗の愛妃だったこと、盛唐の栄華を象徴する存在だったことも大きな理由であろうが、わけても彼女の悲劇的な死が影響を及ぼしたことは疑いの余地がない。そして玄宗と楊貴妃の離別は、杜甫にとって、雲上人の遠い事件にとどまらず、切実な悲しみと同情を生じさせるものではなかっただろうか。なぜなら乱の当時、杜甫自身も妻（奇しくもその姓は楊氏）との離別を余儀なくされていたからである。有名な「月夜」（『詳注』巻四）では、遠い鄜州の妻へ寄せる杜甫の愛情が吐露されている。また、乱の最中に作られた「述懐」（『詳注』巻五）で杜甫は、妻や子の屍が冷たい土の上に無残に朽ちかけている凄惨な光景を想像しおびえている。我が子を餓死に至らしめた経験を持つ杜甫にとって、妻や子の死は想像というより、極めて現実味を帯びた恐怖ではなかったかと思われる。したがって玄宗の別離の悲哀は杜甫自身の境遇にも通じる悲哀であり、杜甫はこれにひろい同情の念を寄せる

に至ったのではないだろうか。そういう意味でも「哀江頭」は、五十年後に成る白居易「長恨歌」の先駆的作品であるとみなすことができると筆者は考える。

注

（1）以下、杜甫の詩のテキストには、原則として仇兆鰲『杜詩詳注』を用いるが、諸本により一部改めた箇所もある。なお詩の繫年は『杜甫年譜』（四川省文史研究館編、四川人民出版社、一九五八年）に拠った。

（2）吉川幸次郎「先帝貴妃」（『吉川幸次郎全集』十二『杜甫私記』所収、筑摩書房、一九七四年、その二七三～二七九頁）。

（3）たとえば、楊国忠の側近であった鮮于中通に奉った「奉贈鮮于京兆二十韻」（『詳注』巻二）の末尾に、「有儒愁餓死　早晩報平津（儒〈＝杜甫〉有り　餓死を愁ふ、早晩　平津〈＝楊国忠〉に報ぜよ）」とある。

（4）戸崎哲彦「同時代人の見た楊貴妃―李白・杜甫の詩歌における比擬表現を中心にして―」（『中国文学報』第四十三冊、一九九一年四月）では、楊貴妃が杜甫詩中でしばしば西王母に比擬されていることに、「仙界たる宮中で權威をふるう恐ろしい女ボスであり、さらに人面をしているが獣心の妖女であるという、痛烈な諷刺」の意があると論じられている。

（5）「金蝦蟆」は安禄山を暗示し、「王母（金蝦蟆を）収（とら）へしめず」という詩句は安禄山と楊貴妃の醜聞を示唆しており、「（金蝦蟆が）化して長黄虬と作る」とは反乱の暗示であるとする説は、南宋・蔡夢弼『杜工部草堂詩箋』に始まり、『詳注』をはじめ広く採用されている。さらに吉川幸次郎『杜甫私記』ではこの説を発展させ、「化作長黄虬」の「虬（＝蚪）」とは角のない龍のことであるのに、それが皇帝の色である黄色をまとっていたというのは、不吉きわまる予兆であるとする（二三七～二三八頁）。この「黄虬（蚪）」という詩語は杜甫以前にほとんど見出し得ないが、ただ、晋書・曹毗伝に「方將舞黄蚪於慶雲、招儀鳳於靈山」という用例があり、ここでは明らかに瑞祥である。なお『文選』では、「虬」を不吉なイメージでとらえている用例は見当たらず、また、杜甫のほかの詩でも、この「虬」

の字が不祥の意で用いられている例は見出せない（たとえば大暦二年の「十七夜対月」［『詳注』巻二十］に「光射潛虬動」とあるが、これは月光に照らされた川面が静かに波打つ光景を表したものであり、不吉なイメージというわけではないと考えられる）。そもそも『文選』李善注に「虬、龍也」（巻三五、張協「七命」注）とあるように、「虬」は単に龍の類義語として用いられることも多い。ここでは、詩の韻脚が下平十八尤（一部十九侯・二十幽を交える）である都合上、「龍」（上平三鐘）の代わりに「虬」（下平二十幽）を用いたとも考えられる。以上のことから、「長黄虬」が謀叛を暗示する不祥であるという説には些か疑問が残る。したがって、「金蝦蟆」が安禄山の比喩であるかどうかは定かでなく、また、前掲の詩句が貴妃・安禄山の醜聞を示唆するものかどうかもいまだ十分には立証されていないように思われる。なお高島俊男『李白と杜甫』（評論社、一九七二年、その一四〇頁）でも、「李白や杜甫の乱以前の作品で、楊氏一族に対する譏刺であるとされているものは、再検討される必要がある」と述べられている。

（6）『詳注』では「草」だが『宋本』等により改める。

（7）『詳注』では「妹」だが『宋本』等により改める。

（8）「北征」［aとする］と「哀江頭」［bとする］について、清・浦起龍『読杜心解』ではaを「義」、bを「情」によるものとし、森槐南『杜詩講義』四（平凡社東洋文庫）ではaを「公義」、bを「私情」によるものとし、吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（筑摩書房、昭和五四年）ではaを「政治評論家としての発言」、bを「抒情詩人としての悲哀」とし、黒川洋一『鑑賞中国の古典　第一七巻　杜甫』（角川書店、昭和六二年）ではaを「公的なことば」、bを「私的なことば」とし、竹村則行「『長恨歌』から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷」（『楊貴妃文学史研究』所収、研文出版、二〇〇三年）ではaを「諫官左拾遺の任にあった杜甫の、国を治むべき士大夫としての見識を示した発言」であるとする。

（9）原文は以下の通り「（上）謂宰相曰、『朕在位垂五十載、倦于憂勤、去秋已欲傳位太子。……朕當親征、且使之監國。事平之日、朕將高枕無爲矣。』楊國忠大懼、退謂韓、虢、秦三夫人曰、『太子素惡吾家專横久矣、若一旦得天下、吾與姊妹併命在旦暮矣！』相與聚哭。使三夫人説貴妃、銜土請命於上。事遂寢。」

(10) なお、楊貴妃を褒姒になぞらえる発想は、必ずしも杜甫の独創とは言えず、むしろ亡命政府内の共通認識であった可能性もある。華清宮があった驪山は褒姒の「亡国の笑い」故事の舞台でもあり、両者のイメージはたやすく結びつくからである。驪山という場所から楊貴妃と褒姒を関連づける詩的発想が歴代の詠史詩に存在することについては、竹村則行「楊貴妃の笑い――杜牧『一騎紅塵妃子笑』詩について」（『楊貴妃文学史研究』所収）に詳細な論考がある。

(11) 静永健「白居易『新楽府』における楊貴妃像」（『白居易「諷諭詩」の研究』勉誠出版、平成十二年）では、かつて一地方官であった頃に「長恨歌」を作った白居易が、のちに左拾遺を拝命するに至って「長恨歌」の過大な流行に驚き、ときに自身の政治生命の危機すら感じた結果、「長恨歌」の美しい楊貴妃像を自ら打ち壊し、「新楽府」において悪女としての楊貴妃像を新たに作り上げた、あるいは作り上げざるを得なかったと論じられている（一五八～一六六頁）。

(12) 「落」は『詳注』では「濕」とするが『千載佳句』『宋本』等により改める。なお題名「曲江対雨」の「対」は『千載佳句』では「遇」、『草堂詩箋』『唐詩類苑』等では「値」となっている。

(13) 鈴木虎雄『杜少陵詩集』巻六（続国訳漢文大成、国民文庫刊行会、一九二八年）でも、「曲江対雨」の制作時期について「蓋し乾元元年三月上巳節の作」と考察している（五四〇頁）。ちなみに上巳節をテーマとする詩を典故としていると思われる詩句は次の通り。

[年芳] 沈約「三月三日率爾成篇」（『文選』巻三十）麗日屬元巳、年芳具在斯。
[林花] 簡文帝「三日侍宴林光殿曲水」（『芸文類聚』巻四）林花初墮蕊、池荷欲吐心。
[別殿] 顔延之「三月三日曲水詩序」（『文選』巻四六）離宮設衛、別殿周徼。

(14) 例外として、広徳元年（七六三）梓州で作られた「冬狩行」の一節には、次のような詩句がある。

朝廷雖無幽王禍　朝廷幽王の禍無しと雖も
得不哀痛塵再蒙　哀痛せざるを得んや　塵再び蒙れり
嗚呼得不哀痛塵再蒙　嗚呼　哀痛せざるを得んや　塵再び蒙れり

（『詳注』巻十二）

この詩は吐蕃が長安に侵攻し、代宗が長安から一時逃げ出したという事件を背景にしている。このころ杜甫が身を寄せていた梓州刺史の章彝が行った大規模な冬狩りの様子を詠い、さらに、狩りをするよりもどうかその優秀な士卒を使って吐蕃軍を生け捕りにしてもらいたいという願いを最後に述べている。引用部分は「今の朝廷には幽王の禍のようなことがなかったのに、再び天子が都から逃げ出されたということは、哀しまずにおれようか」という意味であり、先の安禄山の乱のことが「幽王の禍」に比擬されている。したがってこの詩において楊貴妃は、間接的ながら「北征」のように、悪女褒姒にたとえられていることになる。しかし、この詩は章彝に呼びかける部分があり、章彝が詠むことを想定した公的な作品と考えられる。したがってここで楊貴妃を褒姒にたとえているのは、「北征」と同じく、やはり当時の一般的な見解に従ったものではないだろうか。

(15) これらの、杜甫晩年に作られた楊貴妃関連の詩について、吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊では、「後年、夔州で天宝の盛世を追憶した諸作では、貴妃への憎悪は後退し、かつての宮廷の華麗を主宰した美しき人として、なつかしまれているごとくである。……何といっても杜の敬慕してやまない「先帝」、玄宗上皇の愛したもうたおん方ではあった。」と論じられている（二三二～二三三頁）。